

講演会： 私が学んだ井深大の絶対創造価値論・・・創造の価値と1-10-100

講演者：渡辺誠一 株式会社テックゲートインベストメント代表取締役、元ソニー中央研究所所長



渡辺氏がソニー中央研究所の所長をしていたころ、分所開設に際しソニーの創業者井深大の持論である「創造の価値は不変である」という言葉をモニュメントに刻み、除幕式を行った。井深は車椅子で駆けつけ、研究員の説明に耳を傾け、質問に答えた。研究成果は実用化出来ないものも多い。しかし、考え出した価値は不変であると断言したのである。ちょうど著作権法では、たとえ個人であっても、商売にならなくても最初に書いた人に著作権があるように。ゼロから有である創造の尊厳を井深は重く捉えていたのである。むしろ、研究成果を実用にさせるにはそのプロセスをマネージするプロジェクトリーダーの手腕に負うところがあり、プロジェクトリーダーは内外を問わず上等な人を招聘しろと井深は語っている。それが後日「研究は1、開発は10、事業化は100の力を要することを肝に銘じて経営に望んで欲しい」という言葉として残っている。1、10、100で経営するソニーにはやがて次のような風土が出来た。

1.自由な「発想主義」。2. 言葉でなくまず作る「試作主義」。3. 失敗を恐れぬ「実践主義」。4. 実際に世に問い批判も力に変える「経験主義」。5. 言い出しつpegがやる「言行一致主義」。6. トップも巻き込む「上司活用主義」である。

その結果、ソニー流経営が残したものは次のような姿勢であった。1. 人づくりの重要性。2. 高い志が多くの社員の力を生み、結集させる。3. 積極的な心が驚異的能力を引き出す。4. 一人の感動が多くの人に伝播し、突き動かす。5. 挑戦がリーダーをつくり、リーダーと行動することが人を育てる。6. リーダーの与える困難な課題が人を育て、圧倒的な成功を生む。7. 困難に挑戦する仕事人が人をつくる。8. 結果として「日本人は創造性に乏しい」との批判を払拭した。つまり、予算や技術は付帯であって、奮い立つような人づくりが井深ソニーの本質であった。最後に、日本創造学会に期待する点として「我が国の文化に根ざし、世界の行き詰まりへの趨勢に反転攻勢する創造的経営の理論的構築」などを挙げて締めくくった。

(記事：理事 田村新吾)

ワークショップ：イノベーションと目的工学

講師：紺野 登 KIRO株式会社 代表 多摩大学大学院教授



紺野登多摩大学大学院教授は知識経営、デザイン思考の権威であるが、その延長で21世紀経営に向けたイノベーションに対峙するための方法論を目的工学として集大成した講演であった。イノベーションにはより大きな目的に向けた手段＝技術の選択判断が求められる。目的工学とはより善い目的に基づく経営、および社会・企業・個々の目的を組織的に調整して結果を生み出すための経営からなる。アポロ計画、ソニーのトリニトロン、東海道新幹線の例をもとに目的工学の方法論やマネジメントが示された。

目的＝手段の関係性の推論としてはアリストテレスの実践的三段論法が採用された。具体的ワークショップの一つとしてオランダの国会で取り上げられたOne day chicksプロジェクトの考案が行われた。毎日のように殺されるたくさんの(食用にしてもおいしくない)ヒヨコの雄の国家的損失を防ぐにはどうするかを、目的工学で考えようというプロジェクトである。三つの代替案が提示され、社会的視点・文化的視点・経済的視点から評価がなされ、あっと驚く結論が示され、参加した一同笑いの連続であった。

限られた時間であったが、講演およびワークショップともども参加した会員・非会員の満足度は極めて高いワークショップであった。

(記事：評議員長 國藤進)